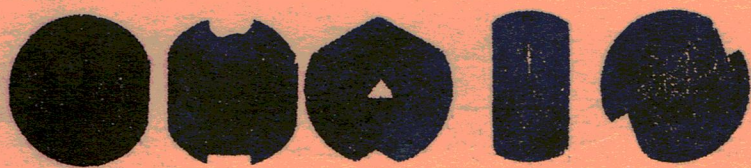


纖維化学科機関誌

N.6



'61.2

## 目次

狭き門 .....	4回生	山崎 真吾	2
卒業を前に .....	4回生	堀江 勝之	3
黒字 .....	1回生	山田 孜郎	4
あれこれ .....	3回生	西久保 敏規	5
人生を楽しく .....	3回生	山名 貞夫	7
二次会での収穫 .....	3回生	佐野 元彦	9
桑田碧海 .....		栢宅 省吾	10
学園生活 .....	1回生	有松 利雄	11
目的喪失からの解放 .....	4回生	山本 泰男	12
一回生のころ .....	4回生	北川 建郎	14
四ッ池 .....	1回生	西尾 尚之	17
げんこつ .....	1回生	志村 義之	18
機関誌の間縁 .....	4回生	太田 晋一	21
わが教室の総合化 .....	4回生	奥村 真也	22
あのころ .....	1回生	西尾 尚之	23
周囲の人に .....	2回生	かたつむり	25
俺はなぜ遅刻ばかりしたか .....	4回生	田辺 守義	26
繊維化学教育の発展のために .....	4回生	青木 寿治	27
あしあとに思うこと .....	3回生	鷓飼 哲雄	28
閉ざされた二人 .....	2回生	山中 一人	29
Wirklich Freund .....	2回生	分部 好孝	33
無題 .....	2回生	合作	35
カオサズの論文集より .....	3回生	吉井 詢二	39
卒業生のゆくえ .....			44
編集部紹介 .....			45
編集後記 .....			46

# 狭き門

4回生 山崎真吾

去る十二月の日曜日、珍らしく教会という所へ足を向けた。その時の話はジイドの「狭き門」の出所で、ルカ伝「力を尽くして狭き門より入れ、滅びに至る門は大きく、その路は広く、之より入る者多し、生命に至る門は狭く、その路は細く、之を見出す者少し」という所の解釈であった。これを聞いていた自分は己に歩んだ四年間を振り返って見た。果して何が残ったか？ 如何にも空しい、愚かな恥しらずな月日、何と軽佻な、努力の少ない重大な時間の浪費、嘲笑すべき怠惰な日々であつたかをあはれにも、その当然の報いとして思い知らされたのである。例えばだ、呪ふべき「ガリ勉」という言葉に惑わされて、真に尊ぶべき「勤勉」を罪深くも軽蔑し、「勤勉」なる姿を人前に現わすのを一種の恥と心得て、講義を抜けたり、ノートを採らなかつたりする事を平気でし、又維なくも自慢にしていた。又そうだからといって教養書を読んだかといへば、その数は余りにも寡少である。思へば愚かな事だ、この三月の卒業証書なるものも、誇るもののない預金のない銀行通帳である。改米の学生は講義は決して欠かさず、猛烈に勉強すると聞く、勿論試験に困るからでもあろうが、彼等は「学士、などというレッテルよりも実力をより重大視するからである。殊に個人主義の徹底した国では実力のないものは脱落するのが必足である。つまり生命(成功)に至るには狭き門、細い路を歩まねばならぬ。所が元来愚かな自分こそ一生懸命にすべきであるのに、何ら努力する事なく広き路を歩いていたのである。諸君！若し将来、君の行く手が岐路になってあれば、ためらう事なく困難な、峻しく苦しい路を選び給え、多くの障害があるだろうが、それは諸君の誇るべき勇気がのりこえてくれるだろう。ある高名な科学者曰く「一つの輝かしい成功は、1%の天才と99%の汗よりなる」と、天才にして然りである、自分と同じく、天才でなく愚かな凡人と考えている友人よ、僅少でも努力しようではないか。一月二十日、オ三十五代米國大統領となったケネディ氏の就任演説を読まれた方は、彼の卓越した力強い名文を称えると共に、ここでもやはり「狭き門」を強調している彼を見出されるであろう。「…(略)我々が自由の維持と成就の爲には、いかなる代償も払い、いかなる重荷をも背負い、いかなる苦難にも立ち向い、いかなる友邦をも支持し、いかなる敵にも対抗するという事を知らせよう…(略)…これら全ては百日で達成されるものではない、千日、いや余生をかけても終らないかもしれない、しかし始めようではないか…(略)…」。

では懐しい、そして素晴らしい同志諸君、健康に留意されて、本当の意味の、もつとアカデミックな匂ひのする学問に専念して下さい。

# “卒業を前に”

4回生 堀 江 勝 之

ふる里を離れて四年の月日が流れた。白く頂いた叡山の姿を見るのも四度目である。正月の月も下旬に入ると、日は一日一日と長くなって行き、早春への足並みを感じずると共に、学園を去る日も間近に迫つて来た。思いは当底一言に表し得ない乍ら、古事にある通り、学成り難くしてあまりにも老い易かったようである。四年間を省ってみると、メランコリと思索の一回生、社会勉強入門の二回生、実験の三回生と過ぎ、学生生活の総仕上げの筈である四回生では、悟りらしきものを感じて終ろうとしている。思うに決して満足な学生生活ではなかったけれども、友人のこと、考究したこと、思い出することは多くて、全てを筆に尽すことは出来ない。卒業を目前にした今、強く脳をたたくものを一つを記したいと思う。

ある夏、私は信州の高原に旅行したことがある。その帰途に、佐久間ダムを訪れ、深い確信を覚えたのである。高原の雄大さは自然そのものの姿であったが、こゝで大きな谷の一点にたたずんだとき、改めて人智の偉大さ、人力の偉大さに打たれ、ファイトを全身に実感した。“真のファイトとは、人智、人力の壁を破ろうとする不屈の勇氣ではないか。”と友人と語ったものである。競技は戦いである。戦争も戦いである。しかし競技はその戦いの中に力の壁を破ろうとする美しい姿を発見出来る。闘鶏は倒れるところまで戦うそうだが、しかし彼等には戦いの意義など知るべくもないのである。

写真と絵画を比較してみると、写真には確かに絵画の及ばぬ正確さのあるのを知ることが出来る。けれども画家の躍動している情熱と、鋭い神経とを感じることが出来ないのが淋しい。世代は既に我々のものである。責任と同時に、自己の信念に基いて、自己の意志を實社会に發揮出来るならば最大の喜びを感じず、我々同輩、先輩、後輩の皆さんが各々のコースに進むのは勿論であるが、生涯生き甲斐を感じずる人こそ、人の最たる道を歩んだと云えましょう。私自身、日本の化学工業の道を歩むことになる。情熱と独創性の姿を一生持ち続ける芸術家でありたいと願っている。若い血気、これは青春のシンボルである。一生失いたくないエネルギーである。真のファイトを持ち続けたいものである。

# 黒字

## 1回生 田中 孜郎

学校が小さいためにクラスも自然小規模となり、不活発にはなりやすいが、部員が皆親しくなるという良い点がある。先日ESSの追出しコンパがあつたので、授業が終るとあたふたと宴会場へかけつけた。定刻より五分位しかおきていないのに多く集まっておられた。着くやいなや「もつておられますか？」と女性に話しかけられた。「なにを？」とききかえす術もない。名簿らしきものをちらつとのぞかされたので「来たな」と思いながらも、ぶきりだけおちついて金を払った。たべたこともない和洋折中食をガチャガチャいわせながら、行われているかくし芸にも無関心で、やつと食べ終った。出て行く四回生を中心に大いにしゃべったり笑ったりした。ESSのコンパといつても、英語で話せるわけでもなく、日本語のあいさつもなっていなかった。僕の番が来て何か別れのことばをいわなければならぬので、英語の歌の歌詞で、うろ憶えの奴を言つてやれと思つて言い出した。二三行すらすら言えたと思つたら、皆がやかましく言うので、これはバレたのかと思つて少しつまんだ。少し皆のいうのを聞いてみると何もわかつていないらしかったが今度は僕の方が上つてしまつて後の文句を忘れてしまった。たわいもなくここで白状して、もうかんばんしてもらった。八時頃になって部長が、「ここでの会は終りにしたい」といつたので「まだ早いのに残念だなア」と思いながらも外へ出た。四回生の人たちが「ついて来い」と言うのでぞろぞろついて行くと喫茶店へ入つて行くので僕もついて入った。ここでは四回生からおごってもらえることがわかつた。なるほどそういえば前会場でそろつて「ただほど恐いものはない」と口にしていただけが今わかつた。一番安いものでは少しつまらないし高いと気の毒なので最低の一つ上の値段のものを注文した。たいしてうまくはなかつたがただという魅力が手伝つてマアマアであつた。蒸し暑くやかましいこの店を出ると、また「ついて来い」といわれて、今度はのみ屋風の所へ行った。日本酒を注文して、万さんはどうだの、この単位をおとしただの、先生の悪点については大笑いをした。気がついてみると十一時半に数分もない。この調子だと最終電車に間にあわないので気がせいた。丁度腹の具合が悪く家までもつかとそれも心配であつた。みずくさい焼鳥も初めてのものなのできれいにたいらげくもつとも量は少なかつたのだ

が、そこを出た。終電車に向にあいそうにもないことを告げると「かまわな  
いから外を歩こう」といわれたのでついていった。たしかに気持が良かった。  
十人位がぞろぞろ歩いているのを人が見たら良からず思うだろう。しかし今  
にして酔っぱらいが外を歩く気持がわかったような気もする。腹のぐあいは  
一応おさまり、どうやらタクシーに乗せてもらえそうだと思うようになり、  
たのしくなった。万一の場合でもどうにか家へは帰れるぐらいの金もあるし  
度胸というほどでもないが度胸がすわった。やはりタクシーに乗れた時、僕  
が一番遠いので気の毒であった。乗りごこちは万点であった。

二次会三次会という経験が初めてであるばかりでなく、上級生におごらせる  
ということも初めてであった。先方もかくごはしていたらしかたが、いつ  
かは当方にもおはちがまわってくると思うと妙な気持である。クラブに入っ  
て先輩の悪戯をこうむったのはこれが初めてであるといつては失礼であらう  
か……。明るい前途を心から祝福したの気持である。

“あれこれ”

### 3回生 西久保敏規

#### 人生

『人生は多分無意味なものであろうが、しかし人間が仕事に情熱をかたむけ  
ている姿は美しい。それが無償であるだけいつそその姿は美しい。』

これはある作家の言葉である。この言葉には味があると思う。

地球は太陽系の中の一つの惑星にすぎず、その太陽系は、銀河系宇宙の中  
のほんの片隅に位置しており、それに生命、ひいては人類が発生したのは、  
単なる偶然の物理的・化学的な条件が整ったからにすぎない。

こう考えてみると地球というものの存在価値は何もないことになり、結局、  
人生の無意味さということにつながってくる。

しかしそれだからといって人間が生きていることは無意味なことだと云う  
のではない。人生全体としての目的は見出せないが、日々我々がすごして  
いる生活には、それぞれ美しさや喜びがいっぱいある。特に仕事—それが人  
生全体から考えればまったく無償の行為なのであるが—に情熱をつくしてい  
る人間の姿というものは、特に素晴らしい美しさがある。たとえ、美しい  
花を、それがそのときに描写しなければ二度と出来ぬものの如く、瞬時も

惜しんで詩作に没入する詩人、あるいは、ものにとりつかれた様に、一心にカンバスに絵具を塗りたくっている画家、彼等のそのような姿には、そうすることが人生全体にとっては全く無償のことであるだけ、いつその美しさがある。かくのごとく人間はずっと旧い時代から無目的な人生を力いっぱい生きぬいて来たし、将来もそうしていくだろうと思う。

註 私ここで云う「人生の意義」というのは、人生全体に対する意義のことである。人生に於ける個々の断片については、それぞれ意義もあり、目的もあるだろう。

## 京都の冬

京都の冬は寒い。これが何よりも特徴的だ。京都は奈良や大阪に比べて、数段（冬には）寒い。それは地理的に盆地であること、大陸から日本海を冷い風がわたってくることに依ると思われる。それに近くに大きな湖があることも何か関係するのではなからうか。（これは私の推定である。）

要するに、京都は大陸性気候だ。冬は寒いくせに夏に暑いのは、こゝからきている。

それに京都の冬の令一つの特徴は、時雨が非常に多いことである。時雨のない日の方が少ないくらいだ。発着の山に黒い雲があらわれるとすぐ時雨れる。寒い風を伴って時雨が通過して行く。

カ三は霧が濃いことだ。これも寒いということに密接に関係する。夜、濃霧の中に、京都駅がぼんやりと浮び上っているのは、ほのかに情緒もあるが、それ以外は何のとりえもない。

## 夜 想

この人生は色々な様相に富み、自分はその中で浮いたり沈んだりしている。自分は時にはその中の中心人物であったり、時には傍観者であったりする。

自分にとって人生は楽しいものでもあるが、又苦しいものでもある。毎日を淡々と送るのが良いのか、悪いのか、自分には分らない。

時計は時を刻み、人生は過ぎてゆくのか、これから始まるのか-----。自分には分らない。

失敗と成功、苦しみと喜び、それらの渦の中で時は過ぎゆく。

[ 一 席 う か が い ]

# “ 人 生 を 楽 し く ”

3 回 生 山 名 貞 夫

「chain」へは初めての投稿である。これまでは自分の身を考えると生意気なことを書くのが気がひけたが、自分の浅はかな考えも述べることにより、皆に教えられ、成長していくのがあたりまえと考え、厚かましく筆をとった次第である。あいつ何をさえずるかと思われる方は一笑に付して頂きたい。

一端この世に生れ出たからには“人生は楽しくなくては”また“楽しまなくては損”というのが僕の目下のがめついが至極あたりまえの人生観である。人生などと大げさなことばだが、要するに毎日の生活を楽しくというささやかなもので、死に際に「人生のすべてを楽しみ思い残すことはない。」などと厚かましいことをいおうとする考えはさらさらない。(オホン、サテオタクアイ)

一口に楽しさといってもいろいろあるが、「悪のたのしさ」なんてものは論外であり、やはり毎日を正しく暮している者に「真の楽しさ」があるのである。また毎日をマージャン、パチンゴ、映画などのいわゆる「娯楽」ばかりで楽しむという者があれば、これでは真に楽しんでいくことにはならぬだろう。楽しさには自ずと各人により違いがあるが、そこにはその人なりに「深さ」というようなものがなければならぬ。各人が自分の能力を一ぱいに発揮し、自分に与えられた仕事にbestを尽して打ち込む、正しさと努力のある生活に真の楽しさがあり、そしてそこに幸福というものが見出されよう。(エエカツコイウタツタ)

最初に柄にもなく大真面目なことを述べたが、要するに日々の生活を楽しむ、“生活をエンジョイする”という余裕のある、明るく、がっがっしない、のんびりとした気持ちを持つとうといいたいのである。僕達青年期の者は何かにつけ悩みの多い時であり、現代の都会人は大なり小なりノイローゼ患者といわれ、日本は青年の自殺者が特に多いそうだが、自殺の原因は何であれ、どんな逆境に立ってもこの“生活を楽しむ”、“人生を楽しく”という「余裕」を持ったなら大てい自殺などバカげたことと思うようになるのではなからうか。(アマイカナ)

「心に太陽を持って」、「口びるに太陽を持って」とはよくいったものである。

現代の日本では、学生においては大学入試、就職のための成績第一主義の



傾向、社会においては立身出世などと自分の自由な立場で生活を楽しむには、余りにも沢山の障害があるが、こんなことを政治が悪いのどのと一々難しくせをつけても急には社会が良くなるはずがなく、ある程度余裕を持ってまわり道もし、融通性を持ちつつ社会の改善に励み、この苦しみを耐えた後に楽しさを発見すべきである。

しかしながらよくある成績オー主義のガリガリ屋さん、あの午この午で優を増やすのに一生けん命な方々を、僕のような可でもよいから単位を如何にして取るかに四苦八苦しているヤツから見ると、何と余裕のない気の毒なヤツよと、彼らには生活に真の楽しさがあるのやろうかと、老婆心ながら心配する次第である。(アガンモノヒガミカナ)

ある程度の成績は取っておかないと、現実にはよい会社に、よい地位につけなくなり、自分の能力を発揮する chance がなくなり、生活を楽しむということに影響を与えるかも知れぬから時にはつまらぬこともやらねばならぬ場合もある。しかしやっぱり若者なら若者らしく運動もし、恋もし、飲み歌い、マージャン、パチンコ、映画で気を晴らし、ハイキング、山、スキーなどにも行き(コレガイイタカッタ)、英気を養って、はっらつとした元気で自分の学問、仕事に打ち込むようにすべきである。試験に100点を取るだけに満足せず、真理の探求に更に励むべきだろう。この何かに没頭するという英気を得るためには時々息抜きが必要であり、この息抜きのための楽しみということが日々の生活の中で又大問題であり、ひいてはこの息ぬきのための楽しみの如何により人格が左右されることにもなる。若い時には若い時にしか出来ぬ楽しみを楽しむことが最も大切なことではなからうか。

さて、4回生の諸兄姉にはこの度は御就任、御進学誠におめでとう存じます。よく社会に出ると学生の時のような自由な気持は持続できぬなどと専ら融通のみを強調したようなことがいわれておりますが、社会では社会なりに自分の best を尽し、正しさをあくまで持ち続けて下さい。そして自分の仕事に励んで卒業後も我々の繊維化学科が天下の繊維化学科になるよう御尽力下さい。(トキニハゴウハイニオゴルコトヲオフスレナキヨウ。) 社会では「融通性」ということが大切でしょうが、いたずらに娯楽におぼれたり、人の前でだけ「ええかっこ」をして立身出世にのみとらわれたり中身のない不正な人間にはならず、深みのある人生を楽しんで下さい。(ドウモナマイキヲイツテスマヘン)、御健康、御幸福をお祈り致します。

以上全くお粗末なことを書いて、入る穴を今から探しているような状態だが、また機会があれば先に述べた「息抜きの楽しみ」などにつき書いてみたい。

しかしそれよりも最近の chain は投稿者の顔ぶれが固定しているので、新しい人の投稿を望む。これでは chain の最初の目的のみんなの話し合いの場という意義がうすれる。みんなで chain を育てていこう。断っておくが僕はこの chain の編集者のまわし者でも何でもない。ただお世話かいのままに述べただけである。(50エンガオシイヤナイカ)

最後に、ある女性がいった。「男性が最も美しいと思う時は、その男性が自分の仕事に一生けん命打ち込んでいる時である。」と。女性もまた然りであろう。(オシヤレバカリガノウジャナイ、シツレイ)

— 未完 オソマツ!! —

## 追出しコンパ 二次会での収穫

3回生 佐野元彦

恒例の追出しコンパも無事終り、ホットした気持で、4回生と一緒に、夜の繁華街へ出ました。その後、二次会をあちらこちらと歩き廻ったのですが、その二次会席上で、4回生諸兄の言葉を耳にして、私は「しめた!」と思いました。これは私達が入学して以来、学生間で解決すべき一つの課題として、いつも気に掛かっていたものだったのです。それは「学生の縦のつながり」ということです。私達が実際に縦のつながりをもつ機会は何と考へてみますと、それは新入生歓迎コンパか追出しコンパ、その他、クラブ活動ぐらいのものだと思われまゝ。しかしこれらはいずれも充分な縦のつながりを持つことが出来ません。自分達の一級上か下の学生なら、少しぐらい知人も出来ませうが、それ以上離れると、ほとんどといってよいくらい知人も出来ませぬ。ここに述べる案は、私達が学生の掲示板を持つ!ということ。掲示板?確かに教室の玄関に小さな掲示板があります。しかし今までをふり返つて見て、これは云わば、公用の掲示板とでも云えそうなもので、私用で使用する事はめつたにありませんでした。そこで、今の掲示板を私用で使える様にするか、又は新しい掲示板を作るか、どちらかです。今ある掲示板を使うとなると、私用、公用が混つて好ましくないと私は考へるので、ですから、新しい掲示板を作る方がよいと思われまゝ。でこの掲示板の用途と云へば、例えば、アルバイトを他人にゆずりたい人とか、その逆にアルバイトを探している人とか、その他、学生の個人的な向合せなど、その旨を紙に書い

て、揭示すればいいと思います。従来なら同級生間でこの様な活動は止つてしまつていたのではないのでしょうか。それから、下級生で特に一般教養の教科書など、勿論、古本ですが、随分安く入手出来るかも知れませんが、ひいては「縁は異なるもの、乙なもの」と云うように、上級生と下級生が今よりもっと、心安く話し合つたり出来るのじゃないのでしょうか。追出しコンパで耳にしたこの案を、「縦のつながり」という問題を解く一助にでもなればと思ひ、一度、一、二回生並びに三回生、先生方に知つて戴だき、もし賛同が得られれば、追出しコンパの残金でく少し足りないかも知れませんが、今春の休みを利用して作りたいと思ひます。如何でしょうか？

## 桑田碧海

相宅省吾

菊の花の薫る昨秋11月、久し振りに岡山の地を踏んだ。

我々が人生のうちで最も楽しい青春の日々を送つた旧校を訪ねてみると、なつかしい寮は跡もなく消え、嘗ての女人禁制の校舎からは美しい男声女声の合唱が聞えてくる。<sup>(バスター)</sup>操山の石に佇み過ぎ去つた二十余年の変わり様を思い浮べ、壊滅した弓の道場に立つて苦しくも楽しかった部生活のことを振りかへつてみたが、当時の思い出となるものは亭々と茂る梅檀の木のみであつた。

このような壊亡よりの新生は何も操山の麓で起つてゐるのみではなかつた。これから行く水島の地の変転こそ、全く桑田変じて青い海となる故事への情であつた。

岡山より倉敷、水島に行く坦々たる産業道路を車を走らせながら、右手にゆるやかな高梁川<sup>(カハシガハ)</sup>を眺めていた。悠久の昔より中国脊梁山脈より流れ出した土砂は高梁川によって運ばれ、その瀬戸の島々を埋め美しい倉敷の町を作り、更に運ばれた土砂は水島の沖合まで遠浅の砂地とした。つい数年前までは潮が引けば、敷料も沖まで干上り、潮が満てばひたひたと渚から水島の声が聞えるところであつた。その淡水と海水の混り合う広大な遠浅の海に、葦が一面に生えその葦を用いて古より簾の工業がこの地運島<sup>(ウツジマ)</sup>に起り、葦簾の日本の需要を殆んどまかかつていたそうである。

しかし、その天然物の簾も新しい合成物塩化ビニルとその安価な押出機の登場によって大きく変り、現在は殆んど95%までそれにとつて変つた。しか

こゝの地方の企業家達は逡取の氣に富み、この技術革命によく従い更にその推進者となつたこのビニール簾の成功を土台として、更に新しいプラスチック工業に進出し始めた。この企業家達が我々の作っているポリエチレンの紡糸の仕事を取り上げ、私がこの水島の地に久し振りに足を運んだのも、このような時の流れによるものであつた。

今、この水島の地に来て、嘗て延々と漑しなく續いていた葦原は巨大なサンドポンプによって新しい土地作りが行はれて、その作られた土地には巨大な工業が起りつゝある。日本鉉業は日本最大の石油精製を始め、更に倉敷レーヨンなどが石油化学工業に進出し、昔からあつた三菱重工業、三島レーヨンなど、一大重化学工業地帯が出現している。

従来の人文地理では、山が迫り水の深い所例えば神戸、舞鶴、香港などが良港と考えられていたが、技術の進歩はこの考えを一掃した。巨大な機械が砂を掘り、陸地を作りながら深い水路を作り、そこに十万吨級のタンカーが遙かアラビアの石油を運んで来る。このような港が千葉に、川崎に、四日市に、堺に、そしてこの水島に出現しつゝある。

今この高梁川の河口に立つて遙か美しい<sup>帯狀</sup>の溪谷より流れ出る水の流れを眺めていると、古人の「独往不可群、滄海成桑田」(儲光羲)の言葉が身にしみて感じられる。青い海が變じて桑田になる、桑田が變じて青い海になる。この感慨は人が生きてゐる限り続くものであろう。

## 学 園 生 活

1 回 生 有 松 利 雄

高校生の時、大学にいつている人などから、「ノートをとるのに忙がしい。」とか、「試験範囲は、ぶあつい本が一冊、だから何ヶ月も前から調べておかななくてはならない。」などと聞かされて、僅か数十頁の試験範囲で苦しんでいる(?)僕にとって、大学とはおつかない所だと思つたり、よしやどこかの大学に受かつたとしても、うまいこと卒業できるかなと思つたり、一方昼頃から学校に行つていたり、それと行き違ひに歸つてゐる大学生を見ては、欠席はおろか、遅刻をしても理由をかいて届を出さねばならない僕達に比べて、自由でいいなとも思つたりしていた。

ところでいざ大学へ入つてみると、先ず修学上の注意とか何とかいって、どえらいおじさんがでてきて、登録してないと講義を受けさせないとか言つ

たり、単位がとれないと卒業させない、これこれしかじかの実例があるとか聞かされて、おつかなびつくり、いよいよこれはどえらい所に来たものだと思つた。

それからもう一年近く<sup>ほ</sup>懸ち、その僕が、今では講義は適当にさぼるし、試験はといへば、スレスレの所で充分ズリルを味わつて、まことに楽しい日々を送っている。何たることだ。

さてこの学校の諸規則とか何とかいうのを見ると、少々(?)単位をおとしても、八年間位はおいてもらえる様だから、じっくり腰を据えて、好きな勉強でもしようと思つた。

## 目的喪失からの解放

4回生 山本 泰男

文豪シラーがこう云つたと蘭口先生のドイツ語の文法の本に書いてあります。「大望を遂げんとする者は、徹するに深く、弁ずるに鋭く、獵るに広く、持するに剛なるを要す」

そもそも今日の様な社会的情况の下にあつては、「大望」をもつのが実にむづかしいことであつて、やゝもすると、というより多くの場合、大望はおろか小望までもうち忘れて、たゞ無目的に、毎日をたゞ惰性のまゝに過ごしている者が少なくないようです。大体日本人という国民は世界にも稀れなる諦めやすい性格をもつ民族であるそうで、われわれもその例外ではないようです。つまり、自らの才能を發揮する以前に、もう諦めてしまつて、自分には才能がないからこれはだめだ、あれもだめだ、ということになる。

これではどうもあまりに情けないようですから、これからこの心理的弊害をとりのぞく方法を考えてみようと思つたのです。オレは毎日目的をもって生きている、とおっしゃるお方はこの辺でこれを読むのをやめていたゞいてさしつかえありません。

まず、シラーについて学ぶ必要があります。シラーは上の様に言いましたしかし上の四つの条件は大望を遂げんとする場合のことです。

いきなり大望をもつのは、赤ン坊が重い荷物を背負おうとするようなものです、これではたちまちおしつぶされてしまいます。ですから最初はごく小さな軽い荷重を背負うことにしなければなりません、その荷物は上の四つの条

年のうちの一つを体得すればよろしい、「徹するに深く」でもよろしい「徹するに広く」でもよろしい。「弁ずるに鋭く」はちよつとやっていないと出来ないし、「持するに剛」はお脳の働きに大いに関係がありますから、ますます難しい。私は「徹するに広く」の主義が一番やりよいように思います。

「専門」というものはどちらかという「徹するに深く」という面が強いです。しかし、深く徹するためにはどうしても足場が広くなくてははいけません。

ということは専門以外のことも多く理解しておく必要があるということです。学校ではちようどうまく 教養課程といて専門外に当ることをいろいろ学ぶ機会があります。しかしどうしてもいろいろな都合で学校での教養科目に制限がありますから、学校でやってくれないことは自分で勉強せねばなりません、勉強といつてももちろん一般社会学も含んでのことですから忙しいことです。このように考えると大望の一部である小望を遂げるためには日常生活のあらゆる行為が目的的にみられることが出来ます。

しかしここに行為の密度が問題になります、行為の密度とはその行為がその場面々々においてどれ程充実しているかということです。それは上の四つの条件を常に念頭においているその度合によって充実度即行為の密度が定まります、この密度が高ければ高い程、遂望意識は充実しますから毎日日々前進しているような気がしてきます。この「気」が必要なのでありまして、これでもってどんどん物事を実行します。とにかくやればよろしい、なんでも結構、そのうちにものを考えるようになります、一番初めから考え込んでしまつてはいけません。弁ずるに鋭く、と持するに剛とはかなり体験してから、実行をかなりしてから初めていえるように思います。

シラーは四つを一踏に並べましたがそこには理論と実践の弁証法的な関係があるのは当然でありまして、つまりは多くの考え方人生観世界観に帰因するのですから、目的を喪失しているお方は世界観が無いということ、それは自分自身の位置を見い出せないのですから自分を見失なっているのです、自分を見失なうのは自分を見つめないからで、見つめないのは行為したり考えたりしない故のことであり 因果応報 ということです。

以上こんなつまらないことをえらそうに書きましたのは、この機関誌の予定のページ数をうめるために編集者から特に頼まれたためでありまして、先輩の皆様が腕を振つて投稿されたならば、当然こんなのはボツにされるのでしようがもしもこれが機関誌にのるとすれば、よほどの原稿不足なのだと思います。編集者の皆様御苦勞様！

《あなた》

頭の中は いっぱい  
胸の中も いっぱい  
何時も あなたのことで  
何処でも あなたのことで

《日曜日》

日曜日……それはまったく退屈きわまる一日です。

独りのときは……

日曜日……それは人生のうちでもっともすばらしい一日でしょう

あなたと二人なら……

《思い出》

あの子の瞳は黒い真珠のように輝いていた、  
あの子の唇は紅の薔薇のように歌っていた、  
あの子の頬は桜色の子兔のようにふっくらと  
あの子の手は真白の棉のように 細やかに、  
今も残っている私の掌に

互いに握り交わしたあのときの手の温み

## 一回生のころ

4回生 北川 建郎

この大学の門をくぐったのは、数年前、御室の桜が咲きみだれている頃だった。京大へ入学出来なかったことの悲哀と新たな自分の運命に対する希望が交錯して心の重い毎日が続いた。まだ高校生だった時、僕は京都大学へ行くのだと友に誓っていた。やってやれぬ事はないと自信に満ちていた。それが一年浪人しても京大へ入れなかった自分の情なさと自分の自惚れに対する腹立ちで心が痛み、なかなかさめやらぬ間に一月が流れた。

五月も終りに近い日曜日、高校のクラス会でハイキングに出かけた。卒業後一年ぶりに会って友情を温め合ったのである。女の人も五六人来ていたが

その中に東海さんもいた。しらずしらずのうちに、彼女の方へと視線がうつった。

ジャンパースカートの腰の線がくっきりと描き出され、白いブラウスがふっくらと盛り上った胸元に、毛編のネクタイが明かるい日ざしを受けて鮮やかな赤色を放っていた。

一日を皆と愉快に過ごした帰りに、彼女を喫茶店へ誘った。

東海さんは、はっらつとして大そう明かるい感じの人だった。勉強の方は僕とクラスで一、二番の成績を争っていた。どちらからともなく、互いによく話しかけるようにしていたのが、三学期ともなると、ただ目と目を合せて語り合うだけのことが非常に楽しい事に思へ、彼女に会えない日は何となく空しく感じるようになった。二人は励げまし合って勉学に勤しんだ。

彼女は卒業して銀行へつとめた。僕が合格出来なかったのを知って書いてくれた、——私も高一の頃はあの素晴らしい京大の門がくぐれたらなあと思いを描いていたのだけれど……。でも行くだけなら二度程行ったことがあるの。それはクロイツァー豊子のピアノ独奏会の時京大ホールへ、そして中学三年の時に、高校入試の模擬テストを受けに行きました。その時はここで勉強が出来たらなあと思っていたの。北島さんの今の生活はつらいものかも知れませんが、でも輝かしい明日の準備のために勉学に励まれるのは貴いことだと思います。北島さんは熱心で努力家だから来年はきっと素晴らしい成績で京大をパスされることでしょう。——と。

確かに明日の準備のために学ぶことは貴いことの一つかも知れない。けれども今日の豊かな青春を満喫できないのはまことにわびしいものです。合格の知らせをたずさえて、あなたにお会い出来ないのが心苦しいばかりです。しかしこのようなことでくしける僕ではありません。あなたを心の太陽として、一年間勉強に励みます。この次お会いする時は、角帽をかぶり、襟にはバッヂをつけてお目にかかりましょう。と僕も書いた。

あまりにも自惚れが強すぎたのだ。再度失敗に終わった時、もはや彼女に会わず顔がないとくやしかった。

しかし再びめぐり合ってみると、いかにそれが短く又子供じみた交際であったとはいえ、ひとしおなつかしさがあふれてきた。話はいつはてるともなく続いた。

「一年間も勉強をしないと、本当に学校がなつかしいわ。大学では何を教わるの」

「法学や経済それにドイツ語も」



「ドイツ語で話がお出来になって」  
「とんでもない。でも少しだけ出来るよ」  
「聞かして下さい」  
「Ich liebe dich」  
「-----」

彼女の澄みきった目がはずかしそうにまばたいた。短く切った髪が幾筋かみだれてその小さな額いにかかっていた。

これが僕の大学生活の半分をエメラルド色に染めた美しき交際の始まりであった。それから、楽しい交際をしたのであるが、それも短いものであった。二年の後、彼女は家族と共に仙台へ行ってしまった。彼女の僕に対するイメージが立派すぎたし、又彼女の心があまりにも美しすぎて僕はとてもそれについて行けなかったのである。

彼女との交際が美しいものであっただけに、別れた後、僕の心の中に彼女は大きな位置を占めてしまった。二人して歩いた山道、走り下りて来る彼女をわが胸にだきとめたときのやわらかな触感、二人いる時僕を包んだ暖かいふんいき、それらが今も忘れられない。

\* \* \* \* \*

私は三月にこの学校を卒業して社会に巣立って行きます。京都工芸繊維大学繊維化学科の卒業生であることに誇りを持って。古い技術の壁を打ち破って進もうとの若いエネルギーに満ちあふれています。

一回生の頃のこの complex が当時の私にあれほどの重大であったにも不拘、今の私には何の重みも感じられなく、単なる温い思い出として残っています。形からの脱却と自分の信念の大きさが、本当に前向きな姿勢であることへの確認が今の私の心を大きく占めています。

この学校へ入学した日に、岩崎先生から聞いた松下村塾の話と、先輩が私達に「我々の繊維化学科を愛して下さい」と言った言葉を常に思い出して、自分なりに繊維化学科の発展を願って努力して来ました。これからも一人一人の愛情でもって私達のこの繊維化学科を育て上げて下さい。

## 随想

## 四ツ池

### 1回生 西尾尚之

洛北、比叡山の麓に僕の母のさとがある。戸数二三百の小じんまりした集落で、その裏はすぐ小山に接している。その山の中には、通称「四ツ池」と呼ばれている池がある。

今から数年前、母のさとの祭によばれていったとき、何げなく思い立ってその池へ行ってみた。小学校へあがるまで 2、3回いったきりであったので、その淡い記憶をたよりに、細い山路をたどって池のふちにたどり着いた。そこにはその名のおり、小さな四つの池がならんでいるのである。片側は水際まで木が生い茂っていて昼でも小しうす暗い。そして四つの池はそれぞれ堤で隔だっていて、水面の高さも少しづつちがうのである。その水の色も各々異なっていて、オ一の池はどろ深そうで、藻が生育していて黒ずんでおり、枯れた木の幹がまるで池のぬしの大蛇のように水中に横たわっている。オ二の池は、オ一のものに比べて少し深いうようで色もいくぶん青い。オ三とオ四の池は青緑色をしており、いかにも深そうで底なしのように水を満々とたたえている。そばを通ったとき、池に水平に突き出した木の幹の上で甲らをもほしていたのであろう亀があたりの静寂を破ってドボンと水の音をひびかせ、一瞬この水音にドキツとした。この神秘的なたたずまいに包まれてじっと水面を見つめていると幼いときのささやかな思い出が僕の頭をかすめた。

x

x

x

終戦直前のころで、僕がまだ五つくらいだったと思う。そのころ僕等は母のさとへ疎開していた。ある日、母といっしょに近所の人も二三人連れだつて花をとり山へ行つた。山ゆりなどをとつて、この池のふちまで出てきた。そして、そこでひと休みした。池の堤の上にはヨモギが生えていたので、母たちはそれをつみ始めた。僕は堤の中央にすわらせ、「じっとしてないと池の中からぬしがひっぱりこみにくるよ」と母にいわれて、そこで小さくなつてた。この堤の中は 2~3m で、その西側が青々とした池である。そのうちに母はヨモギを追ってずんずんと僕のそばから離れていった。その日は風がつかつたので何だか吹きとぼされそうな気がして、しっかりとまわり

の草をつかんでいた。心細かった。今にも池からへびやカツパのようなものがあらわれて僕を池の中へ引きこむのではないかと思うと、泣きたいような気持ちになってきた。しかし母は時々こっちを振り向きながらせつせとヨモギを摘んでいた。しばらくして母が僕のところへもどってきた。僕は思わず、わっと泣いた。

×                    ×                    ×

一人で、ただ一人で池のまわりに立ってこの静かなまわりの雰囲気に身をしずめ、ほんやりと水面をみつめ、そんなことを思い出していた、あの時の姿を想像して思わずふき出した。しかしその同じ堤のところへ行ってみると、青い水色のせきこんだとき、やはりちょっとこわいような気がしないでもなかった。ヨモギも一面に生えひろがっていたが、終戦のころとはちがって、食糧事情もいせいか、摘みにくる人もないらしかった。時折、鋭い鳴き声をたてて、小鳥が頭上を飛んでいった。たまらなく懐かしかった。

×                    ×                    ×

その後、その池へは一度も行かずじまいで、今日にいたっている。あの静かな、何か神秘的とさえ思えるたたずまいは今もかわらずその思い出と共に僕をつつんでくれることであろう。今度、適当な機会をみつけてぜひ行ってみたいと思っている。そして十五年前のあの時と同じ場所に座ってその思い出を静かに取り出したいと思っている、ちょうど今ごろはあの奥床しいにおいをただよわせて山ゆりが池のまわりにその花をひらいているころであろう。

## 「げんこつ」

1 回 生 志 村 義 之

体育祭の前日は午後から冷たい雨がしょぼしょぼ降り続き、おまけに寒々とした風が塵寮の柱の向をすうすう吹き抜けていたから、グラウンドの草っ葉は雨を吸いとれるだけ吸いにとって、平生無精ヒゲを生やした様に雑草が繁っている運動場は青バナを垂れた様でよけい食欲に映って見えた。それでも当日は日曜日でもあったから、子供連れで大学の運動会を楽しもうと、朝早く近所から足を運んで来る人を相当見受けたので、それなら天気の方の心配はまずあるまいと思いやられた。一体何時から始まるのかと高くなった陽を目を細めて眺めて気をもんでいたら、学部長がいつの間にか石壇の上に立って挨拶を始めていた。その時横手の方からぐすぐす忍び笑いが聞こえたとたん、丸々と太つ

た食堂の犬が尾を振って目の前を横切って来て、石壇の付近で立ち止った柏子に、その場にうづくまりそうな気配を見せた。この犬にへんな真似をされて、折角静まった雰囲気は壊されては大変と誰かがぼたぼたと威かして追い出すと耳を後にして逃げ隠れた。あの犬はいつかの講義中でも戸を開けて忍んで来た位だから、多分今日もなどと、頻りに犬を可愛そうがっている、学部長の挨拶は済んでしまって皆散り散りになる所だった。どやどやと縄を廻らせた観覧席に着くと、だしぬけに、雷族の支度は充分かと念を押す様に尋ねられたから、なんの事かとただすと、ただ見るものとの續りだったプログラム最後の仮装行列出演の打合せの事だった、うろたえながらも心の準備をする為と大道具係りの様子を探りに飛んで行くと、人の背丈の二倍もあるまっ黒な右の二の腕がこぶしを固めて突立ってあつて、高い所で赤い絵具でもって、指の間をべたべた塗たくっていた。これが喧嘩をして切られたげんこつだなどと説明してもらっていると、げんこつの後側でべらべら音がするから、妙な細工をするものだと眺めていたら、新聞紙と、のりと、竹切れを一束持ちだしてきたので、前夜のひどい雨風で痛められたげんこつの大穴が風で鳴っているのだと了解した。そのすぐそばで細長くボール紙を断って、黄と黒の塗具で縞を斜めに施し、その両端に棒を巻きつけたものをこしらえていたから、何にするのかと尋ねるとそれが踏切しゃ断機で、僕が今日オートバイに乗ったままで突き破らねばならぬものだと言ってきた。所々ボール紙をつないだ押しピンが突き出て、これに触ったら、ピンが顔や頭に突き刺つて痛いではないかと案じていると、ふいに鉄甲や眼鏡をつけぬ雷族は少し妙だと思いついた。

昼食を済ませてから大急ぎで、鉄甲と眼鏡を求めて、心当りのオートバイを扱う大きな店を探し廻ってみたが、この日はかねて申し合わせのオートバイ団体旅行の当日だそうで、鉄甲と眼鏡の少ないことをこちらがこぼされる位だった。それでも気の毒だと云って紹介してくれた店に一途の望みを托して向かう道の途中で、間口をかなり大きく広げた店を見かけたから、ついうかうかとそこで立ち止って無心することにした。

「繊維大学の学生なのですが」と学校の名を切り口上は、「今日は学校で仮装行列がありまして余分にお持ちでしたらお貸しいただけないでしょうか。甲と眼鏡を」と奥から現われた店主の様子をうかがって慣れ慣れしく頼むと「繊維大学ですな。高雄の方の学校ですな」と店主はうさんくさそうな返事をした。「そうです。御存知でしたか。今日は、実は体育祭でして」と僕が乗りだして話もちかけると、「体育祭ですか。昨日は雨だったのに。出来るんですな」「ええ、出来るのです。この後の仮装行列が甲と眼鏡がなくてはどうも恰好がつかず、弱って

いるのです」「所でお宅の織維大学とうちとはどんな関係があるのです」「いえ別に関係といったものはないのですけど」「ないのでしょうか。うちにも甲や眼鏡などはないのですがな」「え、お持ちでないのですか」「そう、ないのです」こう云ってそれっきり店主はぷいと横を向いて押し黙り、いかにも失礼なことをいう奴だという顔付をしてみせるためにこめかみをぴくぴくさせた。しかし店主が無いといつても、傍らのガラス戸を開けば、鉄甲と眼鏡は転がり出て来そうな気もしたが、これきりの関係もないよそ者がよく中を調べるとも云い難く、またそんな事を云つては、お前はゆすりかとも云つて啗みついて来そうな店主の様子が気味が悪く、といつてこれで引き下るのも口惜しくてたまらぬから、腹いせに店先に唾きでもひっかけて消えてやろうと、足音を荒くしてしきいを踏みこえたはずみに、足がもつれて前にのめり、危く舌を噛みそうになった。いやらしい笑い声を聞いた様な気もしたが、夢中で店を飛びだし、少しして冷たい風に吹かれて気が静まってみると向こうが潤んで見えた。興奮した目頭をこすりながら、恐る恐る時計を心配したら、やるせない気持と不安な気持がごちゃまぜになって一度にこみ上げてきて、極めてゆううつになった。

所が捨てる神あれば助くる神ありで、首尾よく望みの品を貸してもらえる店があつて丁重に礼を述べるひまもなく、急いでとって返すと、やっと思に合つて戻つて来られた。

入学一年来この方この様な事もあつたが、総じて世間には大学と聞いただけで、そこで日を過ごす学生をむやみに有難がつて、丁重な扱いで迎えてくれるきとくなく人が多いのは嬉しい事だ。学園新聞校正の折、印刷工から「スサノオノミコト」がどう書けばよいものかと尋ねられたが、いつか映画の広告などで、その漢字を見かけたことは確かに覚えていたが、文字の方はいざ書いて見せる段になると一向に思い出せず、すっかり弱つて、しどろもどろに返事をすると、あなたは学生だからきつと御存知だと思つて尋ねたのだ。試験問題を印刷しているのに、そんなはっきりせぬのでは困る。といつていきなり背を向けると、むっとりして仕事を続け始めた。いささか腹立たしい気もしたが、その原因が本当にスサノオノミコトと書けない自分にあると認めざるを得なくて、全くそれは振り上げた手り持って行きようのない様な向の悪い経験だった。アルバイトや映画賃汽車賃の割引きに至るまで巾をきかず学生であるが、それ相当地に世間でも学生であれば何でもかでも知らなくては何しからぬと勝手に決めこんでいるらしい。ともかく世間の期待の大きな、恐れ多い学生の身命を、ちよつぱりしけこんだこの一年間だったようだ。（終り）

# 機関誌の周縁

4回生 太田晋一

機関誌 chain が発行されてから既に3年余りたった。

何事についてもそうであるが、物事を最初にやり始めるということは実に大変なことである。私は機関誌を最初に企画し発行した先輩が如何に大きな努力を払ったかを知っている。だから私達は先輩のこうした遺産を大切に育ててゆかねばならない義務を感じる。

ただ、繊維化学科に偶々在籍する者がただそれだけの理由で、共通の何かを行はねばならない義務はない。主義主張を異にし、人生観をはじめ性格、あらゆる点で異った内容をもつ我々が、同じ繊維化学科生であるという、それだけの理由で同一の地点に立って物事を考える必要は全くないように見える。だがもう少し別の地点に立って考えてみよう。

学生生活において友人同志のだべり合いの楽しさは素晴らしいものである。しかし、だべりが本当に面白いためには、だべりの内容において、共通の、話題が様々の異った立場から考えられ、それを互が統一した感じとして受け取る努力をすることが必要である。友人同志が、だべり合いにおいて、莫然と、我々は同じだなという感じを持っている中からは、決して面白い、有益なだべりは得られないであろう。

とかく我々は、同じ考え方、趣味を持つ者同志が、集って、小さく固まっただべりをする傾向がある。それはよいが、それがともすると外側に固い殻を作りがちである。こうなると、これは決して愉快なだべりではない、この殻を打ち破るところから、本当の共通の広場を持ち得ることになるだろう。人と人とのつき合いにおいて、相互に絶えず何かを発見し、違ったものと、同じものとの統一と感で受け取ることが出来る——そうでなければ、そのつき合は、単なる、なれ合いにとどまってしまうだろう。

なれ合いからの脱却は、本当の友人同志において非常に大切なことである。

お互に違った内容をもつ人同志である繊維化学科生同志が、直接にだべり合う機会のないものが、様々の発言の場として、機関誌を利用することは、まず異質のものとのつき合いという意味で、有益となって来るのではないかと思う。

# 我が教室の総合化

4回生 奥村 真也

近頃の新聞雑誌をみると、「総合」という文字が、盛んに目にうつる。いわく総合開発、総合経営、あるいは総合研究と、ちよつとみるとまるで「総合」が、発展、進歩の必須条件であるかのような気分にさせられてしまう。

これだけ総合化が大きくとり上げられて来たのをみると、それだけの必然性が、たしかにあるものと考えられる。企業、経営の総合化の傾向、現状、内容について述べる知識を、私は殆んどもたない。ただ、近頃とみに大きくとりあげられて来た、新しい工業地帯の開発については、自分が、これから産業界に入ろうとする気分からか、いささかの関心をもつて、それらの記事も、今まで読んで来た。つまり、堺、四日市、水島など、すでに、或はこれからそれらの地域に、互に関連をもつた産業が工場を築き、生産活動をおこそうとしているのである。そこで云われるのが、総合的に、ということである。ここで言われている総合とは、単に個々の企業が平等に高い利益をうるためという、場当り式のものであつてはならない、という事が叫ばれている。もはや、経済、土木、建築などの表面的に活動する専門家だけの仕事で、新工業地帯の建設はなくなったのである。社会学者も、心理学者も、法学者も、電気学の専門家も、およそその建設を最高に機能的かつ、将来の発展を充分に見通したものにするために参加するべきであろうといわれている。

寄つてたかつて一つの問題を、各分野の専門家が充分に検討しつくして、結論を出すという、チームワークに従来の日本人は余りに無関心に過ぎたように思う。

この総合について、我々の繊維化学教室にも、一挙に機構までもとは望むのは無理としても、そうした方向への雰囲気を作り出す必要を痛感する。

各教官が、部屋に陣取つて城主然としている時では、すでにない。わが教室全部が、大きな一つのオリジナルなテーマを選んで、教官は各自の専門知識を駆使し、協力してそのテーマを攻撃するという機構を作り出す努力を始めてもよい筈である。何々研究室という区別は、もはや必要でない。各々が自分一人の功名のみを求める心情は、すでに古い。いかに有能な人間といえども、一人でなすうる仕事の量はしれている。チームワークで押して来る仕事

の迫力と内容には対抗しうるものでない。わが教室も、ここらで一つ研究と  
いうことについての考え方を改める時ではなからうか。

## 随想 あ の こ ろ

### 1 回 生 西 尾 尚 之

中学三年の春であった。僕等のクラスに一人の女生徒が転校してきた。名前は加藤博美というのであった。担任の先生に紹介されると、彼女は「加藤博美です。『ひろみ』の『ひろ』は博士の『博』、『み』は美しいという字を書きます」とはきはきした口調で話したので、みんなは、なかなかやりそうなやつだわいというような顔付で彼女の自己紹介をきいていた。彼女は、口数の多くない、気性の烈しそうなたちでその視線は鋭く人を射るようであった。そんな第一印象は、転校という、彼女にとっては一つの大きな環境の変化からくるのかも知れなかった。さつそく席がきめられて、しばらくの間僕の斜後方に机をならべていた。

そのころ僕はクラスの役員を受け持っていた関係で、放課後も学校に残っているいろいろな用事に追われることがしばしばあった、そんな放課後や、休み時間などには、よく教室の隅っこに女生徒が数人ずつグループをなして、何やら談笑していたが、あまり高尚な話などではなく、いわゆる井戸端会議のようなもので入のうわさ話などをさ、やき合っていることの方が多くであった。そんな中であって、加藤弘美はいつもどのグループにもはいらず、ひとりで何やら文庫本らしいものを読みふけっているのであった。彼女としてはどうも同級の女生徒とはなかなか融和しにくいようで、それはその性格たる勝気なところがわざわいしているらしかった。

夏休みも近いころ、僕等のクラスが英語を教わっていた先生が、二週間程痔病の手術のために入院されたことがあった。僕等数人の男連中は先生の御見舞に行こうということになって、ある土曜日の午後連れだって病院を訪れた。先生はあと二、三日で退院とのことで、ベッドのそばの安楽椅子で新聞を誇んだり、屋上を散歩したりして非常に快活に元気であったので僕等は安心して長い間、話し込んだ。話題が学校のことになって、かの新しく転校してきた、加藤博美のことが話にのぼった。その先生は「彼女は、なかなか、英語はよく出来る」といいながら、冗談まじりに「彼女は君が好きなんじゃないや



いかな」と僕の方に向って笑われた。「どうしてですか」とたずねると、「見んなうわきもあるよ」といわれただけで僕ももうそのことは別に何にも気にとめず、そのままとなってしまう。又他のことが話題にのぼり、その後何もなく病院を出た。

夏休みがすぎて、二学期も一月ほどすぎたある日、僕は先学期の出席の統計をとるために教室で出席簿を調べていた。同じ教室では他のクラス役員が数名で、学級新聞の企画をたてていた。帰り道は新聞企画の連中三人と一緒にだった。道々、彼等から妙な話をきかされた。それはこの前、彼等と一緒に英語の先生の御見舞に行ったとき、先生から冗談話としてきかされたと同じ話であった。僕は、彼等がこの間の先生の話をもちだして僕をからかっているのだろうと思ってとり合わなかったが、彼等は、これはたしかだ、何なら女生徒の証人をたてようか、といい出したので、それからというもの、僕は妙な気持にとりつかれた。僕の方では、別に加藤博美に対して特殊な感じをいっていたわけでもなかったが、それ以来彼女を見ると妙に落着かないようになった。次の日に行なわれた数学の試験では変なことを考えていて、つまらない計算間違いをしてしまうことになった。その後、こちらから彼女をそれとなくうかがっていたが、彼女には別に以前と何等かわったところはないようであった。からかわれているのだろうと思ってみた。しかし次第にそんなことも忘れてしまってそのまま卒業してしまった。

その後ずっと、毎年正月には先生をかこんで、同級の卒業生が集まって新年会を雨いている。今年もスキャキパーティーをやったが、めずらしく、毎年姿をみせなかった加藤弘美が出席したのであった。その座には、もちろんかの当時の新聞企画の連中も出席していた。そして僕はそのときふいとあのことを思い出してひとりにが笑いした。

当時はまだ僕も全くの純真く（本人は今でも純真だと思っている）であり、おそらくまんまと彼等に一ぱいかつがれたのであろう。あの時自分と自問したら、今考えたらおかしい程狼狽していた。しかし今でも、本当にあのことはべてんであったのかどうかその真偽のほどはわからずじまいとなっている。いまさら、そんなことをもう忘れてしまっているであろう新聞企画の連中にきいてみるわけにもいかない。しかしその真偽は別にどっちだつてかまわない。あの時は、あれで、自分でも異性から好かれていたのかという気持でそれは妙に落ちつかない、またほのぼのとしたものであった。今さらながらそのことを思い出すと苦笑を禁じ得ないのである。

# 周田の人

## 2回生 かたつむり

敲きつけられた床のノートに 隠された書物に  
黙って笑っている自分に 心ない周田が緊張した

反逆の旗を掲げる奴 反逆は相手の主意に反したのみに  
何年もの同義語が黙々と傾聴した逸品に逐一反抗する骨董屋  
好ましからざる人間の生誕が始まる。

先輩、貴方を尊敬します、貴方の専門知識の深さが故に  
友よ 君達を心から尊敬する。君達の実直にして賢明なるが故に

1人して山を登る時 何故かくもやけに力むのか  
さほどみじめに思わぬ自分を慰めるのは  
友か 恋人か 酒か 自分なのか-----  
無限の中から唯一つ選び出す確率は零である。

周田が自分を誤解する 自分が自分を誤解する  
誤解が自分を誤解させる 分別臭い誤解が自分を見失わせた。

自分を曝け出してはいけない。周田を快くする自分のみを示しなさい。  
それは卑屈だなどと考えてはいけない。  
友よ 君の周田にはこんな事さえ考えずに生きている楽道家が  
無数にいるじゃないか。

# 俺はなぜ遅刻ばかりしたか

## 4回生 田 辺 守 義

小生は、四回生になってから、遅刻ばかりしておる。遅刻するのは、朝寝坊するからである。朝寝するのには、無稽だからであるが、あながちそのせいばかりではない。朝寝坊の境地は、小生の人生の理想である。体をうごかさず、頭もつかわず、たゞぼんやりしているのは、最高の良い。但、ぼんやりしていても、不随意筋だけは、どうにもならん。時いたれば小便をしたくなる。そのうち天の一角から、“おきろおきろ”と親父の声がする。厭でも、一等の境地から、つまらぬ俗世にしりをだす。まことにいかんしごくである。だから、小生は、来世は“大いなる樹”になりたいと考えておるこの“大いなる樹になれ”の文句は、高校卒業に際して、校長が卒業生にあたえた一句である。この句を彼がどんな風な意味でいつたかは一向しらんが、小生は、“大いにねぼうせよ”の意味に解しておる。人間はだれでも、生死の不安を感じている。本能的に、なんらかの苦痛を感じるからであらう。俗事に超然として、いつ倒れるとも、一向にこだわらぬ大いなる樹は、それゆえ、小生の理想である。一人深山にそびえ、はてる時は悠然とひっくりかえって、平然たるの気概は、大いに氣にいつとる。同じ所にすわりこんで、倒れるまでがんばるのは、退屈至極、この退屈に徹して、一生をおわる木は、凡たるの一語につきる。この凡たるの氣風は、小生の好きな境地である。しかして、この境地は、まさに、朝寝坊の境地である。しかして、大樹の氣である。だから、朝寝をして、遅刻ばかりしている。しかし、この大樹の氣もしらずに、まつわりついて、やかましい蟬には、平こうする。“化工がおちとる。単位をとらんと卒業でけん、でけん、でけん”と、うるさいかぎりである。

この“でけん”となく蟬は即、不随意筋みたいなものである。仕方がないから、この拙文を草した機会に、しばらくは、樹の境地から、脱して、せわしなく、かしく、そして、どこかぬけている猿にでもなつて、卒業単位をそろえることにしようとも考えている。

# 纖維化学科教室の発展のために

4回生 青木 壽 治

我々が入学したとき、先ず1人の背が低くて眉毛の長いかわりに髪が薄い老教授に気がついた。そしてその後何か事ある毎に、この先生が引張り出され、また、この先生がひどく頑固であることを知った。そこで、そのころ自分は考えたものである。

「他の先生は、皆あの老先生の頑固さにたてつくとうるさいので遠慮しているのであろっか、それとも或いはあの先生だけがずぼ抜けて偉いので、他の先生が尊敬しているためであろうか。しかし何れにせよ、1人の頑固な者だけが自分の思い通りにできるのならば、それは、ごね得であり結局は纖維化学教室の発展を妨げるものであつて、各先生が互いに積極的な案を持ち寄つて話し合つてこそ真の発展がある。」と。

これは一回生の頃、まだ教室のことをよく知らぬ時に考えていたことであるが、とにかく岩崎教授の、まっ先に云われる様に「円満で協調的な人間になれ」というおことばを、各先生方が守られて纖維化学教室の発展のために尽して戴きたいものである。

次に、この頃考えることであるが、纖維化学に設けられている各講座が、はたして全て纖維化学科の学生に役立っているであろうか、中にはどの科のために作ったのかわからない講座や研究室がありはしないか、ということである。そして実際には卒業論文を決める際に学生の希望のない室も2、3あるのであつて、これらの各室の先生方は、如何なる理由で纖維化学科の学生から嫌われるのかも考えられて、その内容を改めて行かれないかと思う。現在、纖維化学教室に必要な講座が全て揃つているのなら、これでもよいのであるが、「物理化学」や「分析化学」の講座さえないのが現状であるのに、更に今ある講座迄他の科の学生に使われているのでは、もつたないことである。

# あしあとにおもうこと

## 3回生 鷓 飼 哲 雄

足音は奇妙なものである。その人の性格や、そのときの心の状況が、すぐに足の歩み具合に表われておるように思われる。顔を見なくとも、足音だけで、誰が歩いておるかすぐ分ることがある。昔から足音や歩き具合に、いろいろと名称が与えられており、その名称で頭つて、そのときの状況をすぐ連想させるのである。例えば“勇み足”“忍び足”“二の足をふむ”等いくらかでもある。

下宿に為すことなく寝ころんでいると、往来する人の足音が入り混って聞えてくる。“カランゴロン、カランゴロン”と長い周期で歩いているのは風呂から帰ってゆく人であろう。気分が良さそうである。“ゴチゴチゴチ”と短い周期で歩いているのは、主婦の夕食のための買物に急ぐときなのである。二人が歩調をずらせて歩いていると、馬が歩いているようである。

夜もだにぶふけてくると、千鳥足や、御帰籠なせる旦那さんの、口実を考えながら歩いているのであろうのが、しばしば聞かれる。

いちばん快いのは、男の人の胸をはって堂々と歩いているのと、女の人の足をひきずらずに、一直線上を歩いている音である。

足音を録音して、いろいろと分類してみると、おもしろい結果が得られるかもしれない。

オッシロスコープでその波形を調べるのもよからう。みなさん一つ自分の足音や歩き具合を研究してみてください。

## 閉ざされた二人

### 2回生 山中 一人

とうとう西田を死なせてしまった。

春もまだあけたばかりの京都では御室の桜のつぼみもまだ固く賀茂川の融け込んだ北山にはまだ白いものがあつた。でもビロ一樹の青い南紀に行く二人の姿を見て、珍しい者でも見る様な顔で通り過ぎるこの村の人々には、いさゝかくすぐつた気持で照れた様に漸く登りになった山道を登っていく。そう、二人がやっと大学に入学したその門出にと用意もそこそこに飛び出した旅行の終着駅ももう同近かである。去年初めて近畿縦断道路が通るまでは滯八丁を廻る人達でさえ、この今なお平家の落孫と自称する一群の人々の住む十勝村に訪れる人はそう多くはない。

西田と私とはあらかじめ教えられていたある農家兼業の宿屋に荷を下ろした。「さあ、さあ 何もございませんがごゆっくり。」と、初めこの家の敷居をまたいだ時は、76、7才と思われる娘が迎えてくれたが、入れ変りにやって来たこの宿の主婦らしい老婆が泣茶を入れる。

「こゝは静かですね。」「はい、夜などは川の音の外何もきこえませんです。」「婆さん、この川は釣れますか?」「はい、山魚や岩魚がよく釣れます。」私と老婆の話もこれで途切れてしまった。老婆は黙つてせゝらぎに耳をすます風であつた。庭で「コゴケケッゴウとしごくのんひりした鶏の声だったが、それを追っかける様に「しっしっ」とあの娘らしい声が漂つて来た。今までごろりと寝転んでいた西田がむっくり起き上つて、何か懸命に聞く様子なのを「おい。」二人は顔を見合せて、笑つてしまった。

「どや、あの娘。」「可愛いいな。」「何や可愛いいだけか。」西田は気をそがれたのかそれ以上何も云わなかつた。

夜になって風呂から上つてくると二人の向にはもう娘が卓を運んで待つてゐた。二人の目に射球められた様にこの娘は室を出るまで目を上げなかつた。互程二人ともじつと見た。特に西田はいたゞまれなくなつたのか「君はこゝの人?」その返事は聞かれなかつた。目を見合わせた二人は、同合の悪さよ、この人里離れた山奥の煤けた大黒柱の下に黙つているこの娘をつゝむ空更に不気味な気がした位であつた。

二日ばかりこゝに宿して昼は二人でこの川を遡ったりしたが、数時間もばらばらになっていたのは自分が釣に由かっていた事より、その間西田がどこかへ身を隠しているという感じだったが、それ程気にも掛けなかった。

丁度三日目の夜私が風呂から上って来ると、先に床にもぐっていた西田が身を起して黙っていた。私は何か来る時が来たという気持がしたが、わざと知らぬ顔で床にもぐった。「おい。」「何や。」「-----。」

「実はゆきはこの家とは関係ないらしい。」何の事がよく呑み込めなかったがあの娘がゆきだとは向もなく知れた。「ゆきはこゝからまだ十丁程山道に入った和歌山と奈良の県境の某部落の出で、あの婆さんはゆきの母方の親類に当るのやて。」「おいお前はゆきなんて気易う云うてるけど-----。それに何でそんな事知ってんねん。」「-----。」「おい。」「山中、俺はゆきと結婚する積りや。」「ば、ばかな。」自分が今何を考えてこれから何を考えてよいか唯ぐらぐらと来た。西田の様子が変わだという事は知っていたがこゝまで筋が運んでいようとは思わなかった。その上南の女と思えぬ色白の全く男を知らぬ娘の姿に軽い嫉妬が手伝った。私は思わずその横面を一発やったが西田は強情にうつむいたきり一語も発しない。たゞこの山奥に二人のみの救い手のない事が日頃落ち着きだけは持っている信頼していた自分自身に裏切られて混乱した怒りを静めるに時間をとった。私自身ゆきは悪い女とは思わなかった。でもK女子大には浅井という女子学生が彼に好意を寄せている事は私以外にも知っている者は多い。「浅井さんは?」「-----。」

「西田、ゆきさんはどんな女だが知らない。でも単純に悪い女でないと言うだけでは結婚の理由にならんし、あの女が閉された山奥の部落の出という事が気になる。あの人はどうせ中学も満足に出てしまひし、それに-----病気の事が気になる。」「冗談云うな。あの子にそんなものはない。」

「西田、そんならお前もう-----。」「-----。」「おい、お前まさか。」

「山中、ゆきは俺の子を生むかも知れん。」「馬鹿野郎。」

胸倉をつかんで激しくゆすぶりながら私は自然に腰からくだけてべつたりと坐り込んでしまった。「知らん。知らんぞ。俺は何も知らんぞ。」

「山中、俺が無理にしたんじゃない。ゆきも承知の上だ。二人は誓った。聞いてくれ。あの子は京都に出られるだけでも無邪気に喜こんでいる。俺は何も考えたくない。全ては愛情だ。理屈はやめてくれ。頼む、二人を祝福してくれ。そして俺の親父を説き伏せてくれ、頼む。」

私は全く虚脱した一種快感から容易に抜け出せなかった。

結婚という大きな人生の課題が、まだまだ随分先の事だとそれすら考えてい

なかつたのに、突然に、しかも随分不幸な状態の中に訪れた事実の為にこの親友を不幸にしてはという危惧から容易に返事が出来なかつた。

考えてみれば結婚なんて一組の男女が——全く偶然の要素の堆積の内に二人の生活も一人分に還元して互いの抱負を実行する為に結ばれるのだと思つてしまえば、好き合った二人を認めるのが最も自然な型に思われた。

でもこれから死ぬまで二人が同じ生活を営む。私の混乱した頭の暗幕には、<sup>トラス</sup> <sup>トラス</sup> <sup>トラス</sup> 肯と否、それが交互に点つては消えた。言う事は容易だ。しかし自分の眼前に眼をはらして、ぐったりと自身を見失つた親友という背書きの人間を見ていると何故か容易に「よし。」とは云いかねた。

かと云つてゆきを調べて見る気もしない。私は一時も早くこの重荷を誰かに振り変えて自分は唯この二人の回へのさ、やかな嫉妬のみ消しに専念したかつた。「とにかく明日京都へ帰ろう。」「それより認めてくれんのか。俺はそれまで帰らん。絶対帰らんぞ。今帰つたら誰が家で弁護してくれるんだ。」

「しかし自分にその自信はない。」「ゆきの何処が気に入らんのだ。」

「違う。落ちつけ。俺には二人の先の事に……。ゆきさんが悪い人でないのだよは言う。この事はお前自身もつと冷静に考えんと。」

翌朝、新宮まで送るというゆきさんを振り切つて私は彼を促した。

去り掛けに私は彼が千円札の幾枚かをゆきさんの手に握らせるのを見ていた。目を真赤にしたゆきさんと並んだつんぼ棧敷の婆さんには聞えぬ様に「西田はきつと迎えにくるよ。」私はそう言うのが精一杯でした。

あれから半年、西田が一度紀州へ行つたことは彼の友人から聞いたが、彼自身親が自分等を認めてくれて幸せだと語つていた。その頃から段々彼の顔色は悪くなっていったとその友人が話してくれた。医者には心臓麻痺だと診断したと西田の母さんは言つたが自分にはどうも腑に落ちなかつた。私には唯何か人に言えない病気があつたものと思つたが、死の直前彼から受けた手紙にも書いてなかつただけにそのまゝ気にだけ掛けていた。

幾合には浅井さんか来ていた。私は何か気まずいものを感じて声が掛けられなかつた。どんよりと曇つたその天候の内から私は彼の最近の様相が想像された。ゆきは来ていなかった。家の者が知らせる術を知らなかつたのかも知れない。私は西田を失つた空しさにも増してあのゆきさんの事が氣になった。私は西田のお母さんに慰めを言つて浅井さんと帰路についた。

私が二度目に南紀を訪れたのは次の春であつた。今ではもう西田の事もゆきさんの事も他人の心で考えるゆとりが出来たので、その上その後のゆきさんの事が氣掛りだつた。あの不幸の後には簡単な封書を送つた切りであつたし



勿論その返事は来なかった。

「お邪魔します。」出て来たのは先年の老婆だった。そして婆さんはもう私の事は忘れてしまっていた。ゆきさんの居る様子がない。

「実は去年お世話になった学生です。」「あゝ、そいじやゆきの……。さあさあまあお上がりなされ。」あの二人が宿った座敷であった。午後の陽がその庭の柿の蔭を作つてやはり去年の鶏が鳴いていた。

「はあ。ゆきはなあ私の子供でなかったで、親戚の子でしたが両親とも早うなくなつてなあ。唯一人面倒見ていたゆきの兄が人様にいえん病気でなくなりましてゆきは……。」「ええっ。」私はこの時全く解決されていない事を思い出した。そうだったのか、今やっと西田の病気が判つたのだ。何故あの時二人を許したのか。いやあの時已に……。俺に、俺にはどうしようもなかったのだ。「それでゆきさんは。」「そのうゆきは新宮の置き屋へ……可哀想に。そいであの子が自分から行くと言ひ出して……。」

私はその夕の内にその宿を出た。名残りが惜しいと留める老婆の好意に礼を云つて最終のバスに乗った。正直何だか気味悪い気持がして飛び出したものの今では新宮にいるゆきさんの事が心に掛つた。車中は農家の若夫婦とも一入町の若らしい男がいる切りで車は何処にも止らなかつた。

その置き屋は老婆の云つた通り比較的大きかっただけに簡単に見付かつたがそこからゆきを世話したお茶屋というのは捜すのに少し骨が折れた。

「そうでしたか。ゆきちゃんねえ三月ばかり前にこの町の大旦那で手広う林木を頼うてる人に水揚げされましてねえ。何でもその人には何がないとか云うことでゆきちゃんが後妻におさまつて。えらい出世で、もうすぐ子供が出来ますがな。そうそうそんな訳なら一度行ってあげなしたらゆきちゃんも喜びませうが。」そのお茶屋のお上さんが地図まで書いて渡したが、私はもう訪う気はなかつた。木材の積み上げられた熊野川の川辺に腰を下ろしながら私はゆきさんの幸せを考えてみた。男を不幸にする運命を背負わされてそれすら知らないだらうあの伏せ眼勝ちの横顔が何か淋しいものをたゞえていたことが今から考えると彼女の生まれ落ちた時から、既に決められた彼女だけの路であつたのだ。偶々西田がその路に踏み込んだにすぎない。彼女だけの閉された路、西田は喜こんでその路を歩んだのだ。誰もどうしようもないその閉された路を歩んだ二人が私には幸せだったろうかと疑問を投げかける人には答える術を知らない。でも西田は少くとも死ぬまでは幸せでした。そしてゆきさんは。今はもう別人がもしれない。それだからこそ会わずに帰ろう。私は真赤に焼けた熊野灘に浴つて走る列車の窓によりかかつてあの十

藤村のゆきさんを心に連れて帰ろう。新宮の町はやがて一枚の地図になって今私の机の上にある。この中にきつとゆきさんは今日も西田の筆を胸に秘めて幸福に暮しているにちがいない。

## Wirklich Freund

### 2回生 分 部 好 考

テネディ・フルシチョフ・近いところでは池田勇人から乞食・スリ・強盗と人間はこの世の中に多く住し多くの生き方をしているが乞食・スリ・強盗でさえも人間である以上何らかの価値があるはずだ。例えばスリは駅の改札係にでもなれば朝のラッシュも緩和されるだろうし、強盗はそのままでテレビや映画の good talent になる(これは冗談だが)、たとえ平凡な人間でも、十人十色という言葉のある以上個性や長所があるのだ。しかし自分つまらん人間だと考える人は自分で自分の特徴を認識していないのだ。たしかに自分で自分を見い出していくものではあるが真の友達がそれを教えてくれる。なぜなら真の友達というものは、ある人に美点を見い出さずして、特に惹かれるということはなく、彼を尊敬しているからなのである。この世の中にはいろいろの人がいて自分の長所を高く買つて高慢になったり、自惚の奈落に陥込んでしまう人(案外女性に多い)もいるがこの様な人には真の友というものは出来ない。昨年三月頃の映画の話だが、“渚にて”という映画に於てエヴァガードナーの扮するモイテは「自分を愛することは出来ない」といっているが彼女は自分の長所を見い出していなかったからこういうことを言ったのだし、又自分の長所を表面に出そうとしなかったから、求める友人(幸福)を得られなかったのだ。相手の美点を認めずして同性との結びつきを決してありえないのであるが男女関係の場合はこの以外の方、即ち性的魅力というものが大きく影響する。しかし sex だけで結ばれた夫婦生活は幸福をいつまでも維持することは出来ない。映画“危険な曲り角”に表わされる若き人々、彼等はロックンやスピード、セックスにひたり、刹那刹那に生きる人間である。しかしこの映画の主人公達は最後に人間性をとりもどしたということを描いていた。この映画のバックは現在の平和な時代であることも考えなければいけない。即彼等はなぜ平和な時代にあの様に騒ぐのか？それはあまりにも平和すぎて単純な生活に飽きたからである。近頃のテレビでも西部劇、スリラーもの、探偵もの、おだやかなものでも冷たい夫婦生活

もの、などに人気があるのも変化のある生活を欲しているからであろう。亦“渚にて”のモイテの話にもどるが彼女も自分を一人の人間として認めてくれる人間が現われたことよって自分を理解した。この映画は原子戦争による放射能で全人類がこの地球上から一掃されるという時期であるから自分をみつめる余裕もないのは当然であるかも知れない。不安定な社会状態にあるから自分も不安となる又たとえ病氣はしていなくても精神的に不安定であることも自己の良さを見い出されず、一人悩み、あるつまらないことを思いつめて自殺へと導びく場合がある。自殺の話になったが日本は率の高いところであるらしい。このことは日本人がいかにか世界が狭いかということを示している。しかし考え方をかえると日本はいかにか住みにくいかということもいえる。自殺者を性別に分けてみると男性の方が多いいということである。このことは男性の方はいろいろと考えることが多く、その上大相なところがあるからだと思う。といって女性の自殺を勧めているのではない、それだけでなく私には女性がまわってこないのに……。しかしある方向から見ると女性は自己嫌悪に対して忍耐があるからともいえる。(なぜなら日に何度となく鏡を見ているから免疫が出来ているからだ。) キリスト教では自殺することは大罪であるとされているから他の国では少ないのかもしれない。私も自殺をするものは愚かなものとする。外国人はどんなことにも多かれ少なかれ自分の意見をもっているが日本人にはそういうところがないということも原因だろう。彼等はPrideをもっているのだ。Prideといっても過ぎたるは及ばずが如しという様に、自惚れたり、高慢になってしまえば真の友人はもてないと先に記した通りである。私は浮気なところがあつて書いてある途中で一服でもすると考えていることが異なつて来るので以上の様に話があつちこつちに入つてしまつて読みにくいと思いますが悪しからず、亦読み終つた人はこいつえらそうな事書きやがつて、お前には全然長所がないやないかと思われ人につけ加えておきますが、私は心臓のつよいオッチョコチヨイという点が欠点であり長所であると考えている。

以上の様に真の友達の数が自分の人格のバロメーターでもあるから孤独な人間はえらい人ではないのだ。偉人には多くの友達がある。とはいつてもキリスト教などの宗教で全ての人は皆友人だといつても間違つてゐる。

# 無題

## 2 回 生 合 作

雪のちらつく月曜日だった。クラスきつての美女乙さんが、石炭が赤々と燃えるストーブを前に心も燃えて来たのか、彼女の初恋について、丁君にかなり激げしく話しかけていた。「私今年の……一昨年かしら、いやもっと前からだったと思うわ。そのころは今よりももっと純情だったと思うわ。あら疑うの。本当よ、でも信用して下さいならそれでもいいの。あの人だけに知ってもらえたら。それから……静かな喫茶店の事だった。レモンスカッシュを前にして二人は、何も云わずに、互に目を見合っていたっけね。私目に涙をためてうつつむいていました。とうとう彼は云いました。“あんた泣いてんのね!!” 私は顔をあげて彼を見たの。そして彼の目を見ると、何んだかほっとしたの。だってあんなにきれいだったのだから、私が間違っていたということがすぐに解ったわ。私が初めて彼に会ったのは、その時じゃないのよ。そうね、高校の二年の時だったわ、そのときも今日みたいに雪がちらついていたの。私はオーバーにくるまって歩いていたの。私は背がちっちゃいから、きっとオーバーが歩いている様だったと思うわ。堀端には狂い咲きの桜があったの。」

彼女は益々心が燃えて来たかの如く熱っぽい目で丁君を見た。そのかわいい唇をかすかに開きっぱなしのまま、その時だった。

彼女は突然-----。

僕はそれでしかるべきだったんだと思っっている。若い乙さんと丁君にとって、否、動機は最も単純であったかもしれない。初恋の思い出を語らっている中に、彼のイメージが丁君と-----。いや逆かもしれない。丁君に初恋をうちあけるといのは、すでに潜意识の契に丁君があったのだった。若い男がきまり悪そうに顔を見合わせた時には、短かい冬の太陽はすでに西の空に薄まやかにかすんで、赤々とした輪廓を見せていた。それは、あたかも彼等二人の-----。

店を出るとすぐその前は車のしげく走っているそう広くない通りだった。丁は黙って、その車の流れを見つめた。「俺は一体何をしようとしているのか。この女に俺の気持を話そうとしたことは確かだった。しかし一体、何

を話そうというのか、好きだと云うのか、本当に好きなのか。」喫茶店の口の甘く深い音楽の中に泳ぎまわっていた自分を思い出そうとした筈と、剣を走る自動車の流れに合わない自分をもどかしく思った。何か話さなければと、そう思って、とうとう口を開いた。

「去年の正月の筈だっと思うが、年始回りで、とんでもない失敗をしたことをおぼえています。友人の家へ遊びに行つて、酒に酔つて眠り込んでしまったんですよ」

その場の空気には全然そぐわない、まるで他人事のような口調だった。二人は黙つて歩いた。あせればあせるほど、何も頭には思い浮ばなかった。電車通りへいつのまにかやつて来ていた。二人はそこで別れた。彼は何かしら安心をおぼえた。

どんより静んだ憂鬱の日が続いた。外はこの二三日雲一つない上天気だったが、冬に独特のからつとした冷い風は、外套のすそを必要以上に揺ぶっていた。下宿の西側の大きなガラス戸を開けると、相変らず少し雪化粧の寝ぼけ顔だった。

下から下宿のおぼさんの声がした。「お友達ですよ。」聞えないふりをして黙つていた。トントンと階段を昇る音がした。「あら、おきてたんですか。彼は黙つてうなずいた。「お客さんですよ、少しかたづけなくちやあ、」片付けが終ると下へおりにいってしまった。ガタガタと大儀そうな足音と共に、ヒゲヅラの男の顔が現われた。彼の浪人時代の友人で、今は何んでも東京の私立大学へ行つていて、頭は良くはないが、親分はだの男であつた。彼と手紙が絶えてから久しかった。

「よお、何だお前か、よく介つたなあ、まあ座れ。」

彼の訪れをいぶかる顔をしてすすめた。彼は部屋の中を見廻わしながら喋つた。

「学校に会いに行つたら、お前がもう歸つて、居なかつたので、ここと聞いて来たんだ。いい所に住んでいるな。」下はそれに答えず、「学校はもう休みか、やけに早く試験が終つたんだなあ」といった。試験と云つて我ながら胸に涼風が通りぬけた。あの夕から彼にはもう試験などどうでもよかつた。

下は背は普通で、少し小太りの良家の育ちだけあつて色白の男であつた。欠点と云えば、人づき合が悪い位のものだが、それも頭の良すぎる為に、他人の馬鹿さかげんに入り込んでいけないといった種類のものだった。現在は京都の一角に下宿しているが、自宅は広島市内にあつて、電車で20分程行った所にあり、その昔の大地主で、今は兄は、百貨店くとはいつても地方

的なもの  
一度こ  
論伴侶が  
ままで音  
「お前近  
の下宿の  
ゆ毛が静  
んとも説  
乙さん  
らは、彼  
彼女の可  
「お邪魔  
顔を見合  
しかし皮  
人であ一  
すが」「  
いてちよ  
で私に会  
戸惑つて  
に黙り込  
や、あつ  
尋ねしよ  
もあたり  
と弟の二  
た。  
下には心  
しい女子  
たので、  
ら、つい  
Fはそ  
ける機会  
々酒に逃  
Fの氣  
下はFの

的なものだったが)の経営者で、父はすでに隠居といった身分だった。

一度この父が尋ねて来た時に、彼はオンスに出掛けていたことがある。無論伴侶が誰であるかは、読者諸君がもっとも良く御存知である。随分、わがままで育った彼でさえ、この父には頭が上らなかった。

「お前近頃どうも様子がおかしい。小遣いも倍になるし、顔色も良くないとの下宿の小母さんからの手紙にやっ来てみたが。」年若い親父の白いまゆ毛が静かに下りて来て、その生気のない目を閉じていた。Tの顔には、何んとも説明しがたいあせりがあった。「こんな所へ、乙さんでも来たら……。」

乙さんが住む下宿からは十分とはかからない。でもあの出来事があったからは、彼女の足もこゝ少し、遠のいていたのだ。今日当りもしや……。

彼女の可愛い顔もあの白鳥オデッセイを呪う老婆のそれとなった。

「お邪魔します。」下には誰も居ないのが、応待に出る声がない。Tは父と顔を見合わせていたが、やがて何かを期待して下りていった。

しかし皮肉にもその期待は裏切られた。そこに立っていたのは彼の尋ねたぬ人であった。「お邪魔します。こちらにTさんは……?」「はあ、Tは僕ですが」「はあ、申し遅れました。実は私、Fの姉でございます。弟の事についてちょっとお尋ねしたいことがあって……。」「はあ、どうぞ」彼は地獄で仏に会った顔付きで彼女を招じ入れた。親父はその妙なコントラストに、戸惑っている風であった。Tは簡単に紹介を済ますと、自分も気まり悪そうに黙り込んだ。

やゝあって、「実は弟が近頃様子がおかしいので、弟と一番親しい貴男にお尋ねしようと思ひましたの。弟は近頃家に帰るのが遅く、酒気をおびて私にもあたりちらし、たまにおとなしくしていても、私に口もきけませんの。私と弟の二人きりの毎日ですのので心配で心配で。」もう彼女の声は涙ぐんでいった。

Tには心当りがあつた。先月のはじめにあつたある音楽会で、隣席にいた美しい女子高校生に、Fは完全に魅せられてしまった。しかし彼は気が弱かつたので、音楽会のはじめからおわりまで、心の中でアイラブユーと云いながら、ついに口に出して云うことが出来なかつた。

Fはその後も時々、河原町通りで、彼女と出会つたことがあるが、話しかける機会を失なつてしまつたのであつた。それ以来、Fはふさがちで、時々酒に逃避を試みる様になつた。

Fの気持はTによく分つていた。T自身も同じような悩みをもつていた。TはFの余蘊としてやつた。そして最後につけ加えたFの悩みの一部には、

姉の態度にも原因があるのではないか。つまり、あまりにもFに干渉しすぎるのではないかと。もつともこれは、かたわらに座っている彼の父への彼自身の弁解でもあった。Fの姉は帰っていった。再びTと彼の父の二人だけとなった時、父がお説教の続きをはじめた。しかしあまり厳しいものではなかった。Tの父も、Tの先程の言葉をもつともだと思つたのであろう。息子ももう大学生なのだから、自分で責任ある行動がとれるはずだとも思つたのだらう。世間の親馬鹿が思うように、自分の息子はえらい人物だと思つていたのであろう。

Tの父は翌日帰っていった。

相変わらず憂うつな日が続き、毎夜、空を眺め、遠くの山々の雄大な姿を、町の灯を眺めて、ありし日の自分の姿の数々を思い浮べるのであつた。そんな時、いつも思い浮ぶ文句を口ずさむのも、又彼の性格によるのである。

「ああ、うるわしの青春よ、 過ぎ去りてはかなし  
 楽しきは、楽しめ、 必ず知らぬ人の命ぞぞ

ともかく、今は精神的にも肉体的にも、過去の自分とは全く異なつていたのであつた。

ある雪のちらつく日の午後、Tは友達に知れぬように、Fをつれてそっと教室を出た。図書館の片隅で、「君は最近生活がだ落しているのと違うか。悩みがあるなら俺に云つてくれ、出来ることなら何んとかしてやるよ」と云つた。しかしFは女のことだとは云えなかった。なぜならFはTに対して一種のジェラシーを感じていたからである。しかし、Tの話術にはFの頭ではとうていかなわなかつた。しづしづ、音楽会の日のことを説明した。

「よし、まかしとき。」「で電話番号はわかっているのだらうな。」「うん、(39) 7117だ」「そうか、それじゃ、一週間後には君の所に彼女から手紙が来るだらうよ。楽しみにしときや。元氣だせよ。」そう云いながらもTは腹の中で、色々のことを考えていた。Fは授業には出ているが、ぼうっとしている状態が多かつた。それは全く無理からぬことである。念願かなつて彼女から手紙が来て以来、三日と欠かさずデートをしているのである。そんなFをTは、一週間ばかり見まもつていたが、ある日無理にFを下宿につれて来て、「女にうつつをぬかし、学問に身が入らぬ様ではどうする。」「うん、があの娘の顔が本に映つてしかたない、勉強しようと思つても、出来んのや。が、そのうちに立直るよ。」しかしFのそんな状態が一月も続いて、2月の初めには、再び以前のFに返つていた。しかし、その人間性は、以上のFとはorderの異なる世界にいたのであつた。

# ”カロザスの論文集から (II)”

3回生 吉井 詢 二

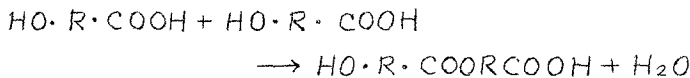
## Polymer and Polyfunctionality

(縮合重合の官能基による説明)

Transactions Faraday Society 32, 39-49(1936)

カロザスは、縮合重合を一般に、二官能基系のもものと更に、higher-order のものとの併せて考えた。彼はまず Difunctional type の例として、hydroxy acid を採っている。

(I) 二官能基系反応： その反応は



となる。上の左の2つの反応分子は monomer で、最初の生成物は2つの構造単位を有するところの dimer である。この反応で、最近の官能基の半分が消滅してしまつた事になる。同様にして2つのエステル縮合の生成 (trimer) の反応は、67%、tetramer では 75% の反応に当る。

d. h.

$p$  : 反応性度 (Degree of reaction)

$x$  : 平均重合度 (Average degree of Polymerization)

とすると、

$$P = 1 - 1/x \dots \dots \dots (1)$$

なる関係式が成立する。(1)の式については次の値をとる。

$P$	0	0.5	0.8	0.9	0.95	0.99	0.999
$x$	1	2	5	10	20	100	1000

平均分子量は(上の表から明らか通り)反応性度が0.95を越えると、急激に上昇する。(dx/dp = 1/(1-p)<sup>2</sup>)

ここで、Carothers はこう結論を下している。

「それ故、縮合 (C) 重合に依つて、巨大分子を得る事も不可能な事ではない。もし、 $P$  の値が1に達すると、(理論的には)分子量は無限大と



いう事になる。( (1) 式で  $\lim_{p \rightarrow 1} x = \infty$  )

(II) 多官能基反応 :

この仮想的な例として、 $R(COOH)_4$  なる酸をとりあげて、そしてその分子間無水物の生成の結果を考えている。ここでの条件は、反応はどの段階に於ても分子内反応は起らない様なものに限定されている。その酸を  $A^f$  で表わすと、その無水物は、

-----  $-A^2-A^2-A^2-A^2-A^2-A^2-A^2-$  ----- etc. となるであろう。ここで Subscript は各単位(構造)が二つの未反応の carboxyls を含んでいる事を示している。それ故、全ての分子が一つに結合し、最早それ以上、分子間反応が起り得ないものとする、当初に存在した所の官能基の 50% のみが消滅した事になる。(d.f.  $p=0.5$ ) (ここで分枝鎖の生成は、勿論この結論に対して、何らの影響を与えないものである。)

かくして、反応性度と重合、官能性度間の一様式を引き出し得る。

$f$  = 官能性度 (degree of functionality) d. h. monomer  
分子当りの官能基数

$N_0$  = 当初に存在した monomer 分子数

とすると  $N_0 f$  = 当初に存在した官能基数となる。

$N$  = 反応後の monomer 分子数

$2(N_0 - N)$  = (2ヶの官能基が一つの結合で失なわれるから)

反応に依って消失した官能基数。

$$\frac{2(N_0 - N)}{N_0 f} = \text{fraction of function lost}$$

$$= p = \text{extent of reaction}$$

$N_0/N$  は 明らかに平均重合度 =  $x$  であるから

上の式から  $N_0, N$  を消去して

$$2/f - 2/x f = p = \text{反応性度 (degree of reaction)} \text{----- (2)}$$

となる。( (1) 式は (2) 式で  $f=2$  としたものである。)

ここで、この式の興味ある応用例を見てみる。例えば、二塩基酸とグリコールとを加熱すると、線状ポリエステルが生成するが、その酸の消滅経過に依って、その生成反応が測定されるにつれて、生成物の平均分子量は、おそらく (2) 式に従って上昇すると思われる。彼によれば、その反応は 99% を完了した後は、非常に緩慢となり、分子量の計算値は 15,000 ~ 20,000 に近づくとのものである。生成物は可溶、可溶である。

同様  
て、そ  
あるに  
明白な  
なポリ  
しない  
order  
る。さ  
この  
と、そ  
更に分  
から2  
単一分  
がなく  
可溶性  
再び  
は無規  
この  
基系の  
がわか  
量無限  
0二官  
到底達  
0三官  
0四官  
とする  
その平  
(  
(2)  
ならな  
は、二  
では、  
ジエ

同様に二塩基酸とグリセリンと加熱すると、最初は反応が進行するにつれて、その混合物の粘度は緩慢に変化するだけで、酸の多くは未反応のままであるにも拘わらず、その粘度は極限に達する。生成物は不溶、不融である。明白な事であるが、二官能性反応は線状ポリマーのみを生成し得る。その様なポリマー中には、非常な高分子量に於てすら、その溶解度と熔解度が消失しないという証拠がある。しかし(二塩基酸とグリセリンの如く) higher order のものの反応は常に三次元的に広がる可能性のあることを示している。さて話は  $\cdots A^2-A^2-A^2-A^2-A^2-\cdots$  で表わされた無水物にもどる。

この鎖が100単位長であり d. h. 200の carboxyls を有すると仮定すると、その様な分子は溶解、熔解する事は容易であろうと思われる。しかし、更に分子間反応が起るものとする、鎖は架橋結合されねばならない。各鎖から2ケのカルボキシル基が消滅してしまった時、鎖は全てからみ合つて、単一分子と化するであろう。この結果、(200のカルボキシル基の中で2ケがなくなった訳で) 残存する carboxyls は1%の消滅となる、又可溶性、可溶性という事もなくなるであろう。

再び(2)式にもどって、もし $x$ が非常に大きくなると(2)式のオニ項は無視できる。  
 $\therefore p = \frac{2}{f}$

この式によれば、反応度がどの位で、分子量が無限大になるか又、多官能基系の反応に於て、何処でゲル化が起り、分子間反応が停止するかという事がわかる。(ゲル化とは不溶、不融の3次元構造物が生成する。d. h. 分子量無限大の巨大分子の生成を意味する。p=1の場合である。)

○二官能基反応では、(f=2)  $p = \frac{2}{f} = 1$  であるが、この値は実際には到底達し得ないもの故、ゲル化は決して起らないであろう。

○三官能基反応に対してはその極限值は  $p = \frac{2}{3}$  ( $\because f=3$ )

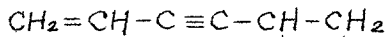
○四官能基反応の場合は  $p = \frac{1}{2}$  ( $\because f=4$ ) である。f=4の時、 $x=100$  とすると、 $p=49.5\%$  の所を通る際に、反応度pに微小の変化が起つてもその平均分子量は、小さい値から大きい値に突然変わるのに気付くであろう。

$$\left( \frac{dx}{dp} = \frac{2f}{(2-fp)^2} \text{ で } f=4 \text{ として } \frac{dx}{dp} = \frac{2}{(1-2p)^2} \right)$$

(2)式を応用するに当つては、無論、その場の化学関係を考慮に入れねばならない。各段階に於て、反応が専ら分子間に限られているなら、二重結合は、二重機能(double function)として勘定される。多官能性化合物では、それらの全ての官能基を行使する事は多くない。

ジエンからのポリスレンの生成に際しては、ジエンの1.4の位置のみが、

最初に活動する。残った官能基の二重結合は、少し条件が変わったところで、架橋を生ずる。アセチレンは四官能性化合物とみなされるので、cuprene 生成の時の如く挙動するであろう。ジヴィニルアセチレンの生成においては  $(CH_2=CH-C\equiv C-CH=CH_2)$ 、その不飽和の半分のみを勘定に入れる。この物質は又熱重合の初期の段階において、e.g.



$CH_2-CH-C\equiv C-CH=CH_2$  を生じる。即ち二官能化合物のように振舞う。しかし、ジヴィニルアセチレンの全てが反応してしまわずと以前に、ゲル化は通常起る。(2)式が適用される反応の大部分はおそらく、互いに補い合って反応する官能基の二つの反応体を含む所の、A-B型であろう。それぞれの反応体が  $A^2B^2$  なる二官能性のものなら反応は全体として事実上二官能性であり、 $A^3B^3$  なら三官能性という次方である。

しかるに、AとBとでの分子当りの当量数が異ってくると話は混入してくる。Carothersはここで、2ヶの可能性を区別しなければならないとしている。d.k.

- (a) 平均して、Aの各結合された分子はB分子の相当数だけの結合 — coupling — を含むとすると、官能性度は、2つの反応体(A, B)が等しい量だけ採られた時のそれらの分子量当りの平均官能基である。かくして、グリセリン ( $A^3$ ) と無水フタル酸 ( $B^2$ ) との反応 ( $A^3B^2$ ) では、グリセリン2モルと3モルの無水フタル酸をとらねばならないから、(全体では  $2 \times 3 + 3 \times 2 = 12$  の官能基が5分子中に有るから)  $f = 12/5 = 2.4$  となる。 $x = \infty$  では  $p = 2/2.4 = 0.833$  これが反応限界である。(83%)

$$\left( \begin{array}{l} (2) \text{式で } f = 2.4 \text{ では } p = 2/2.4 - 2/2.4x \text{ であるから} \\ \lim_{x \rightarrow \infty} p = 2/2.4 = 5/6 = 0.833 \end{array} \right)$$

これは、83% 官能基がなくなると、分子間反応が進まない事を示している。d.k. この値は如何なる組合せの  $A^3B^2$  系の反応があるうと、ゲル化の起らない前に達し得る極大反応値を示している。

- (b) もう一つの大きい可能性は以下の如くである。

即ちグリセリンは最初、鎖を生じながら、あたかも、2官能性化合物の如く振舞う。  $-A'-B-A'-B-A'-B-A'-B-$  etc.

(プライムは未反応水酸基を示す。) しかる後に、グリセリン分子の全ては、その官能基の  $2/3$  のみを失って一つに結合する。(勿論、無水フタル酸の  $1/3$  は全く未反応のままである。) ここに、 $f = 3$

官能  
あつて  
である  
いう見  
わから  
が互に  
メカニ  
即ち

この構  
同類の

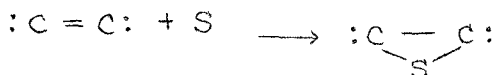
二重  
ゴム分  
約0.15  
ベンゼ

として、 $p = 66.7\%$  これがゲル化と両立し得る最小反応度である。  
 ゲル化の反応度は、多くの研究者の実験によると一般に  $75 \sim 80\%$   
 の間である。

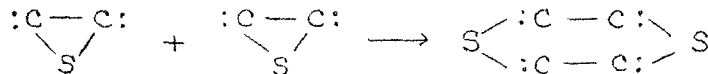
(e.g. Tourn. Am. Chem. Soc. 51, 509, (1929))

官能性度 ( $f$ ) が数百〜数千に達する所の重合反応は非常に重要なもので  
 あって、ゴムの加硫(その詳しい構造は未だ不明であるのだが)はその一例  
 である。その証拠は、加硫が二重結合の反応を通じての架橋の結果である  
 という見解に有利であるように傾いている。(加硫の機構の詳しい事は未だに  
 わからないようであるが、炭化水素間の長い鎖の間に架橋ができて、それら  
 が互に結合して三次元的構造をとる事は明らかである。) カロザスは加硫の  
 メカニズムを次の様に仮定している。

即ち若干の二重結合では



この構造の硫化物は不安定である事が知られている。そして更に隣接分子の  
 同類の基を反応が起るのである。



二重結合が  $0.04\%$  だけ消滅した時、又は硫黄が  $0.02$  重量% 位反応した時、  
 ゴム分子は全て架橋される。加硫開始に要する硫黄の最低値は、実験的には、  
 約  $0.15\%$  である。スタウデインガーとホイエルはスチレン中のジ・ヴィニル  
 ベンゼンの  $0.01\%$  程度のもは不溶性ポリマーとなる事を紹介している。

Ber. 67, 1164, (1934)

68, 1618, (1935)

昭和35年度

卒業生のゆくえ

相	青木 壽治	東洋レーヨン	岩	向井 淳彦	帝国人絹
岩	青木 靖夫	日本紡績	岩	吉田 公三	山陽パルプ
相	林 勲	三菱造船	岩	岡田 初三	オーレース
相	堀江 勝之	日産化学	岩	奥村 真也	三菱製紙
町	飯田 慶夫	呉羽化成	漢	大西 公允	鐘淵紡績
	今井 瞭	丸善石油	相	太田 晋一	住友電工
町	片山 正雄	三菱商事	町	香藤 章	倉敷レイヨン
貴	川瀬 明雄	日本トレーディング	町	坂田 弘二	原藤整染
浜	北村 武彦	丸善石油		沢田 俊宣	新日本塗料
町	近藤 洋一	東洋化学	相	清水 三郎	田辺プラスチック
相	窪田 幸代	高分子化学工業	相	朱 炫 暎	京大大学院
相	俣木 和夫	日本ペイント	岩	高橋 宏実	日本クロス
岩	北川 建郎	オー工業製薬	相	田辺 守義	京大大学院
町	森 順一	光陽塗料	町	谷口 輝男	東洋紡績

岩 富  
岩 和  
町 渡  
山  
町 山  
岩 山  
山  
山  
山  
山

機  
1

岩 富川 昌也	三洋油脂	岩 山内 讓	大日本インキ製造
岩 和田 有文	呉羽紡績	岩 安本 泰三	鐘淵化学
門 渡辺 務	東洋綿花	岩 吉田 実	東福レーヨン
岩 山川 勝	東洋レーヨン	門 吉田 周司	京大大学院
門 山本 貞生	長栄樹脂	門 吉野 泰	芦森工業
岩 山本 省三	関西ペイント	鈴木 国夫	超工業高校
岩 山本 泰男	日本レイヨン	篠田 延成	富士帽子工業
岩 山崎 真吾	日本油脂		

## 編集部紹介

4回生 太田 晋一

3回生 早川 和彦

3回生 荒瀬 治夫

3回生 荒谷 善夫

機関誌の目的からして、広い層の編集委員が望ましいと思っておりますので  
1・2回生の積極的な参加を期待します。

## 編 集 後 記

我々今の三回生が入学した年、四回生であつた先輩達が、専門の化学のみの狭いセクショナルリズムから脱皮すべく、一つの手段として、機関誌の発行をものしてから、三年間を経過して、本誌はやつと6号を発行しましたが、今年からは発行部数を多くし、繊維化学科学生全体及び先生方と、種々の問題について、共に考えて行きたいと思ひます。この様な意味で、この機関誌が、いわゆる話し合いの場を提供できれば、この機関誌のささやかな目的は達せられたと思ひます。

次号からの原稿は、期間を設けず、募集しますから、各クラス委員又は編集委員に、どしどし、寄稿して下さい。尚、表紙のデザインも募集します。本号のデザインは、三回生の片山君のアイデアを借りました。

( 編 集 子 )

---

発 行 日    1961年2月15日

発 行 者    京都工芸繊維大学繊維化学科学生

印   刷    北斗印刷社    TEL (7) 0231

編   集    繊維化学科学生機関誌編集部

編集代表    荒   谷   善   夫